

I : 6が教えている事は、祈りとは、神と自分との交わりに、すべてを集中すべき事を教えている。祈りは、人間の魂の最高の働き。人は心から祈っている時、最高の状態であり、面と向かって神にお会いしている。

祈りは、人の魂の最高の働き。神の前に静まり祈る時、神は私達の真の状態を示し、真の動機を示して下さる。

霊的な意味で、今、自分がどこに立っているのかを真に知るのは、心が分散される領域から離れて、神と深く交わっている時。

歴史上、深い霊性を持った聖徒の特徴は、密室の祈りに多くの時間を費やしただけではなく、同時にそれ（神との交わり）を楽しんだという事。聖徒と呼ばれるのにふさわしい人々は、神との会話に多くの時間を費やしている。祈りは不可欠であり、重要な事柄である。イエス様も祈りを非常に大切にされた。

「イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。『主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。』（ルカ11：1）。

彼らの心にこの願いが起こったのは、人間に一番必要な祈りの大切さを意識していたから。また、主ご自身の祈りの生涯を見つめたとき、祈りを教えていただく彼らの願いは、非常に強くなった。

彼らは主が、「朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所に行き、そこで祈っておられた」（マルコ1：35）事、主が夜徹して祈られた事（ルカ6：12）を知っていた。

「どうして主は、あんなに祈りを大切にされるのだろう、祈りに打ち込まれるのだろう」と思ったことだろう。

「私たちにも祈りを教えてください」と彼らは願った。これは主の喜ばれる願いだった。祈る事を教えていただくのは、私達にとっても最大の必要である。正しく祈る事を知らないなら、素晴らしい数々の祝福を私達は失い、体験できない事になる。主が教えられた「主の祈り」こそ、①どう祈るべきか、また、②何を祈るべきかに関する主の完全な教えである。「主の祈り」は、包括的であり、完全な要約。主の祈りは、すべての原則、骨組を含んでいる。その構成の見事さ、すべてを要約し、わずかな行数に縮めておられる手法そのものが、主の祈りを教えられた主こそ、実に神である御子イエスに他ならないという事実を宣言している。

ある霊的な説教者は言っている。

「私の密室の祈りにおいて何を祈り忘れても、『主の祈り』を祈っている限り、とにかくすべての原則を含めた事になるのだと考えて、慰められて来た。もちろんそれは、単に機械的に言葉を繰り返していれば良いというのではない。全身全霊を込めて、心から本当に祈っているという条件のもとにおいてであることはいうまでもない」。

主が、この素晴らしい『主の祈り』を教えて下さったのは、彼らが残りの生涯、ただ機械的にこれを繰り返し唱える為ではなかった。それは、私達が自分の心に次のように言い聞かせる為だった。「私が祈る時、いつも心に留めるべき事がある。何かの衝動や感情に縛られて祈るだけはいけない。いつも心に留める事柄がある。この「主の祈り」に原則、柱、骨組、道順がある。この骨組み、道順に添って、自分の心のこもった言葉を付け加えるのである。祈る時、心を静める、御言葉を味わう。神の臨在にふれる。

「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願うする先に、あなたがたの必要なものを知っておられるからです」：8→祈りは、神に私たちの願い事を知らせる事だけの為ではない。

素晴らしい父なる神は、私たちが願うする先に、その願い事だけではなく、真に必要なものを知っておられる。感謝！

では、なぜ、祈る必要があるのか？

それは、祈りとは、ただの願い事を神に知らせる事ではなく、私達自身を愛し存在を喜んでおられる父なる神との交わりだから。

親が、子どもの願いを知っていても、それを子が親に正直に打ち明け真実に会話をし交わってくれる事を喜ぶように。

御父は、子である私たちとの交わりを心から喜ばれる。

## II 「だからこう祈りなさい『天にいます私たちの父よ』：9。

呼びかけの深い意味→「天にいます」=天と地の造り主。全知全能、永遠のお方、偉大な聖なる神。本来は罪ある私達は、決して近づけないお方に、御子の十字架の血の大いなる恵みの故に近づけている事を深く思い起こす。

しかしまた、その偉大な神が、キリストにより私達の父（最高の父と母の愛を持った様な最高の霊的な親）となって下さった事、私達のすべてを全能の神として御存知であるばかりか、父がその子のすべてを知っているという意味で、私たちのすべ

てを知っておられる事を深く覚えたい。

御父は、子である私達に何が真に益か御存知。全能の父なる神は、聖なる愛をもって私達を見つめ、私達のあらゆる必要を知っていて下さる。私たちのかすかな溜息も聴き分け、永遠の変わらない愛をもって愛して下さる。御父が一番望んでおられるのは、私たちの祝福、幸い、喜び。

さらに御父は「私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方」(エペ3：20)であることを思い起こそう。

御父は、私達が祝福されたいと切望しているよりも遥かに勝って、子である私達を祝福したいと切望しておられる。御父の全能の力には限界がない。

神は地上のすべての祝福をもって、私達を祝福して下さることができる。

主にある私達の生涯は、神御自身の恵みによるすべての栄光と霊的富をもって富ましていただく事ができる。

願い事を捧げる前に、どんな求めにも先立って、このような偉大で愛に満ちた御父の御前にいるという事実をはっきり自覚して祈りたい。

これが主の祈りの祈り方。

順序に注目→初めの三つは、神の栄光に関するもの。

残りの三つは、私たち自身に関係がある。

この順序は大切。願い事だけが先に来る祈りは、どんなに偉大で恵み深い方の前にいるかを忘れ、祈っていても、神ではなく、願い事や、悩みが取り去られる事だけに心が集中してしまう。

まず神の前に静まり、偉大で愛のお方に語りかけたい！